

## 4-4

# 授業と結びつけた家庭学習の充実 —習得から探究につなげる活用の授業づくりを通して—

大阪教育大学附属平野中学校 井寄 芳春

## はじめに

「学力向上のための基本調査2008(以下、「基本調査2008」)」では、「家庭学習力」が総合的に高い子どもほど教科学力が高く、「家庭学習力」の育成は多面的に図られる必要があるとしている。現場の教師としては「当然のことである」との印象を持つ。けれども、今までこのような客観的なデータに基づき、改善の方法が具体的、総合的に示されたことはなかったのではないだろうか。今回の調査結果は、学校として組織的、計画的に家庭学習を充実させるための貴重なデータと改善の方向性を示している。

「基本調査2008」のテーマは、「授業と結びつけた家庭学習充実のための取り組みの在り方を探る—家庭学習充実に向けての学校・教師・保護者の連携を目指して—」である。ポイントは「授業と結びつけた家庭学習」により、「家庭学習力」を高め、学力向上に資することである。家庭学習と連動させた授業展開の工夫や改善が不可欠であり、家庭学習を含みこんだカリキュラムマネジメントのあり方が求められている。

今回、本校における「基本調査2008」のデータを分析するとともに、本校の研究テーマ(読解力向上)と結びつけた家庭学習のあり方について考察を進め、最後に今後の課題について述べる。主として社会科の取り組みを事例にあげているが、他教科にも関連する部分が多いと推察する。

## 1 「学力向上のための基本調査2008」 本校の調査結果より

### 1 調査結果(子ども・保護者・教師調査)・学力プロフィールの分析から

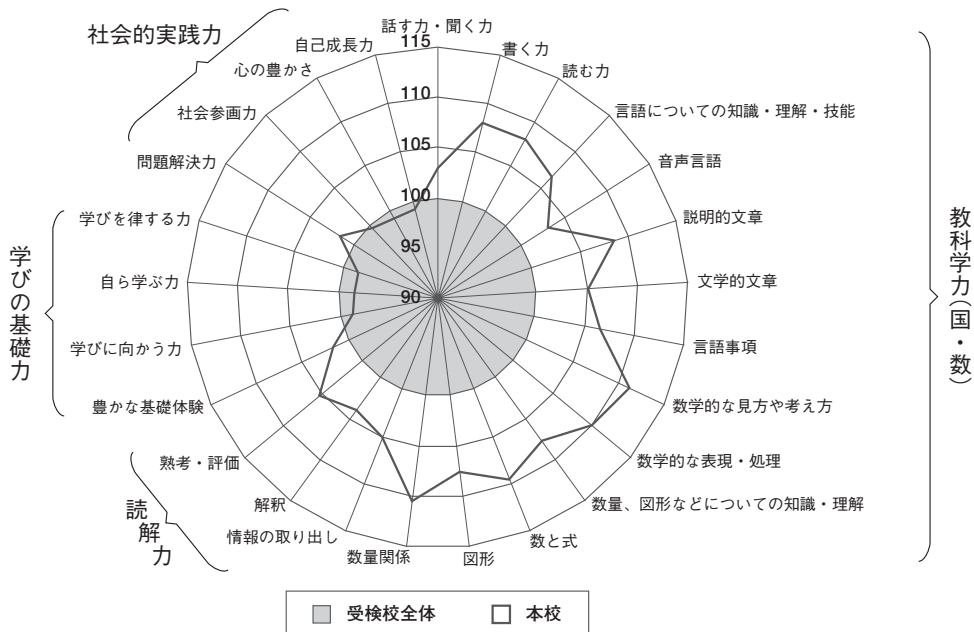
図表4-4-1は本校の学力プロフィールである(実施日:平成20年5月23日・対象:中学2年生)。本校の各スコアについて、受検校全体のスコアを基準に標準得点に換算したものである。全体としては、受検校全体の標準得点(100点)を上回っているが、バランスを欠いたプロフィールになっている。すなわち国語、数学の「教科学力」に関する得点は高いが、「学びの基礎力」や「社会的実践力」は相対的に低い。

詳しく見ると、「学びの基礎力」の中では、「学びに向かう力」「学びを律する力(授業への姿勢)」、「社会的実践力」では「自己成長力」が低く「将来かなえてみたい夢がある」という項目で肯定的な回答をした生徒の割合は、受検校全体と比較して4.1ポイント低い。「学びに向かう力」の下位項目である「学習動機」が低く、「問5⑦:学習して身

につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役立つと思う」という項目については「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」をあわせると約25%あり、肯定的な回答をした生徒の割合は、受検校全体と比較して、4.4ポイント、低くなっている。

図表には示されていないが、「家庭学習力」では「自己学習力」と「学習マネジメント力」の得点が低い。「自己学習力」の項目で特に目がつくのは「問11⑨:自分で取り組む家での学習は楽しいと思う」(否定的回答、約65%)「問11⑬:次の日の授業がわかりやすくなるように予習している」(否定的回答、約72%)であり、「学習マネジメント力」では「問11⑭:毎日どんな学習をしたかノートなどに記録をつけるようにしている」(否定的回答、約80%)である。

図表 4-4-1 本校の学力プロフィール



## 2 意識に関する調査から一受検校全体と比較して

本校生徒の「宿題に対する現状認識」はどうだろうか。「問13①：次の授業のためにやっておくことがあらかじめわかっている、計画的に取り組める宿題が多い」「問13⑤：先生が自分で工夫した宿題が出る」「問13⑥：もっとやってみたいと思うような宿題がよく出る」「問13⑩：宿題のめあてや評価の考え方が示されているので取り組みやすい」といった項目に関しては比較的肯定的に

答えている(受検校全体の平均との差がプラス10ポイント以上ある項目)。

一方で「問13②：先生は、提出した宿題をきちんとチェックしてくれる」「問13⑨：先生は、家での学習の仕方や使う参考書などの相談に乗ってくれる」「問13⑪：自分の弱点や理解度に合った宿題が出る」の項目は受検校全体の平均と比較して低い傾向にある。

## 3 本校の実態と改善に向けての取り組みの方向性

本校では、全体として教科学力は比較的高いといえるが、将来に向けて学ぶ意味や価値を認識し、意欲的、計画的に学習を推進していく力が弱いと考えられる。また、本校では教師が独自に工夫した宿題を出しているものの、個別の指導や対応が十分ではないと感じている生徒が多い。家庭学習の重要性はどの教師も認識しているが、個に応じた宿題の内容や取り組みせ方についてさらに改善していかなければならない。

単に家庭学習(宿題)内容の工夫だけでなく、教科のカリキュラムマネジメントの視点から、授

業と結びつけた家庭学習の充実を図る方向で検討する必要がある。生徒一人ひとりの自立的な学習能力を高めていくためには、家庭学習においても同様に、自立を促すような内容・方法を提示できなくてはならない。家庭では「一人学び」ができる環境にあるため、自立的な学習能力を身に付けやすい場ともいえるが、逆に自立性が十分に育っていないと恣意的で集中の欠けた学習になってしまいかねない。

以上の点からも「一人学び」の力を学校と家庭における多彩な学習経験の中で高めていくことが

肝要である。特に習得・活用・探究のバランスを図り、「社会的実践力」「自己成長力」を培いつつ、学習意欲を高めていくような学習プログラムを開発することが求められよう。このことは、新学習

指導要領において「学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養う」ことや「家庭との連携を図りながら学習習慣を確立する」ことにも関連付けられる。

## 2 学力向上を目指す学校研究の推進と家庭学習の充実に向けて

### 1 本校の学校研究から

本校の平成20年度の研究主題は、「リーディング・リテラシー（読解力）を育てるカリキュラムマネジメントの研究-習得から探究につながる活用の授業づくり-」である。特に、習得・活用・探究の「活用」に焦点をあてた授業づくりのあり方について研究を進めている。重点課題としては以下の二点である。

- 幼・小・中の連携を踏まえ、教科（必修・選択）、道徳、総合的学習等を関連付けながら授業を構想し、実践・考察・検証を行う。
- 基礎的な知識とスキルの習得を促し、それらを活用しながら考え、表現できる力を身に付けられるようなカリキュラムを編成、運用するための効果的なシステムのあり方を探る。

マクロとしての「連携教育を踏まえたカリキュラム開発」、ミクロとしての「活用を重視した授業研究」を軸に、両者を有機的に関連付け、研究実践を進めることにした。

これらの研究実践の基盤に「リーディング・リテラシー（Reading Literacy）」がある。各教科におけるリーディング・リテラシーを本校の問題解決型の総合的学習に関連付けることにより、基礎的な知識とスキルの習得、またそれらを活用しながら考え、他者に適切に伝達（表現）できる力を身に付けることができるのではないかと考えた。

### 2 活用力を軸にした家庭と授業の接続

活用力（各教科の知識・技能を活用する能力）は習得や探究の媒介となる極めて重要な能力である。活用力を高めることは基礎的な知識とスキルの確かな習得や豊かな探究を促すことにつながり、家庭学習と授業を結びつける上でも重要な意味を持つ。確かに豊かな活用力を身に付けるためには、「基礎的な知識とスキルの習得を促し、それらを活用しながら考え、表現できる」場面が必要であり、家庭学習（一人学び）と教室（集団での学び）を統一的にとらえる「効果的なシステムのあり方」が不可欠である。

子どもたちには家庭学習場面、授業場面等において多彩な学習経験を蓄積させつつ、学習の場に応じた活用力を累積的に向上させていく必要がある。そのためにも学習課題に対し自律的に取り組む習慣や態度を形成し、的確な自己評価のもと学習を継続化、日常化させていく方略を構想しなければならない。家庭での学習経験・学習成果を授業で活用し、また授業で学んだ知識やスキルを家庭でも活用するような、双方向的な学びのシステムを構築していきたい。そのことが知識やスキルの確かな習得につながっていくものと考えている。

### 3 リーディング・リテラシー(読解力)を育てる観点から

OECDのリーディング・リテラシーの定義は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。テキスト(連続・非連続)を活用して熟考するとともに、既存の知識を活用してテキストを読解しさらに知識を発達させる。多様なテキストの読解とそれに伴う解釈や熟考、評価によって、リーディング・リテラシーは向上し、基礎的な知識とスキルの習得につながる。

特に「書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する」ことは「習得・活用・探究」と同義であり、すべての教科に通じる重要な学習プロセスであるといえる。「習得から探究につながる活用の授業づくり」を通してリーディング・リテラシーと活用力、さらには学校や家庭における自立的な学習

能力を高めていきたい。

Benesse教育開発センターが発刊した「学力向上のための基本調査2006」では、調査データの分析から「『読解力』の向上に関係する学習活動や指導を、学校あるいは家庭でのみ経験している子どもに比べて、学校と家庭の双方で経験している子どもの『読解力』のスコアは高い」とある。

「学校と家庭の双方」において「学習活動や指導」を豊かに展開していることが、読解力(リーディング・リテラシー)の向上にとって有効なのである。このことは活用力にも当てはまる。本校が掲げる研究主題、「リーディング・リテラシー(読解力)を育てるカリキュラムマネジメント」は家庭における学習活動(家庭学習課題・宿題)を含みこんだ形で進めることにより、よい高い効果を発揮することが期待できる。

### 4 家庭学習の質を高め、学習習慣を養うアプローチ-習得・活用・探究-

活用力を高めていくためには、家庭学習(一人学び・個人思考)と教室(集団での学び・集団思考)を統一的にとらえた「効果的なシステムのあり方」が求められる。このためにも、本校の課題点である、「学びに向かう力」や「学びを律する力」「自己学習力」、「学習マネジメント力」を総合的に高めるアプローチを策定する必要がある。「何を教えるか」「どのような課題を出すか」という内容的側面だけではなく、子どもの学習意欲(内発的動機)や学習スキルをどう高めるかという方法的側面も重視し、学校と家庭の学びの質を相即的に高めていく手立てを講じなければならない。特にリーディング・リテラシーや活用力は思考・判断・表現と深く関連付けられており、学校と家

庭における学習が有機的に関連し、連続していることが望まれる。

本報告書終章の、「学力向上への提言10か条」で「②とくに家庭学習の充実は、応用(活用)型の学力の向上にとって重要である」とあり、さらに「③子どもの宿題への取り組みにおいては、基礎的な反復ドリルだけでなく、応用的・探究的な課題も合わせて行わせることが教科学力の向上につながる」としている。

家庭学習と授業(各教科)の連携においては、双方ともに、基礎基本の習得と発展的課題のバランスを図り、家庭で取り組む学習課題と授業で取り組む学習課題を豊かに関連付けるカリキュラムデザインが求められる。

### 3 家庭学習の充実に向けて -各教科(必修・選択)・領域での取り組み-

#### 1 家庭学習の充実に向けたアプローチ -四つのタイプの家庭学習課題-

家庭学習の充実のためには自律的な学習態度や能力を高めていかなければならない。そのためには単に宿題を増やすだけでは充分ではない。

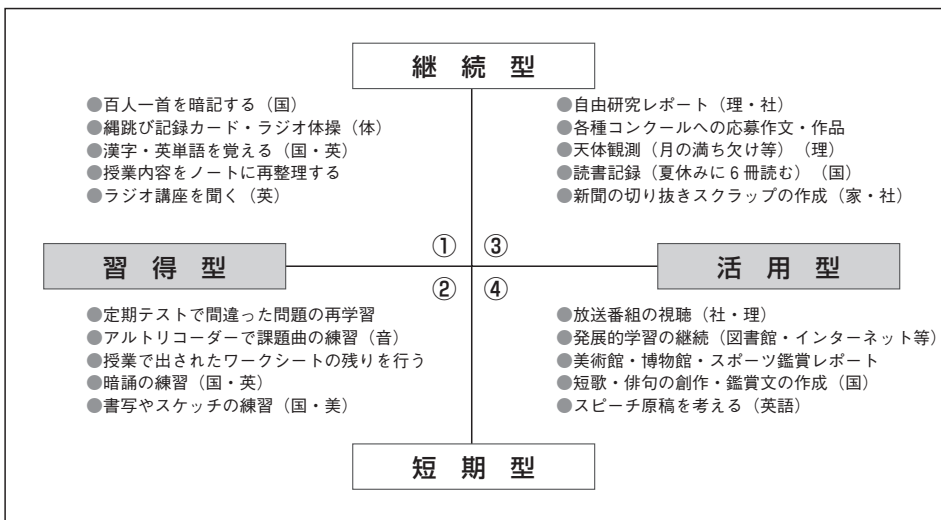
一般に家庭学習課題は、「個人課題」と「学校課題」に分けることができる。前者は子どもが自ら家庭で取り組むべき課題を設け、主体的に取り組む学習である。後者は教師によって指示された課題である。前者は自律的家庭学習課題、後者は他律的家庭学習課題といえよう。

教師は他律的家庭学習課題の質的向上を通して

自律的な家庭学習態度や能力を培っていくことを目指さなければならない。そのためにも、各教科の授業と関連付けた意図的、計画的な指導を通して授業と家庭学習の相乗効果を図りたい。

家庭学習をその目的側面から「習得型」と「活应用型」、方法的側面から「継続型(比較的長期に渡って取り組むもの)」と「短期型(比較的短期間で取り組むもの)」に分類して整理する。図表4-4-2は目的側面を横軸に、方法的側面を縦軸にして四つのタイプに整理したものである。

図表 4-4-2 大阪教育大学附属平野中学校の家庭学習課題 (一部)



- ①**継続-習得型**……漢字や英単語の暗記、数学ドリル、ノート整理等、継続して取り組む課題
- ②**短期-習得型**……授業で配付されたワークシート、テスト等の準備として取り組む課題
- ③**継続-活应用型**……長期休業期間等を利用して自由研究や読書、レポート等に取り組む課題
- ④**短期-活应用型**……発展的学習や課題学習の一部として家庭で取り組む課題

本校において各教科で出される家庭学習課題・宿題をこの図表に位置づけてみると、教科の特性

によって「①**継続-習得型**」が多いものもあれば、「④**短期-活应用型**」が多いものもある。

## 2 「継続－習得型家庭学習課題」と「短期－活用型家庭学習課題」の重視

学校と家庭の学びの質を相即的に高めていくためには、これらの四つの象限を意識し、教科の特性を考慮しながらバランスよく取り組ませ、家庭においても習得と活用のバランスを図る必要がある。特に「①継続－習得型」によって基礎学力を充実する取り組みと「④短期－活用型」によって応用・発展的な学力を高める取り組みを重視したい。

すなわち、「継続－習得型家庭学習課題」によ

って学習習慣を身に付けさせつつ、教科の知識やスキルを定着させる。さらに、「短期－活用型学習課題」を生かした発展的学習によって活用力を高め、より確かな習得を促していく。山に喩えると「継続－習得型家庭学習課題」は裾野にあたり、「短期－活用型学習課題」は高さにあたるといえよう。継続的な学習によって学力の基盤を広げ、発展的な学習によって活用力を高め、質の高い確かな学力の形成に向かうのである。

## 3 「継続－習得型家庭学習課題」としてのノート指導の見直し

### ①ノート活用力を高める指導方法の工夫

本校が新学期に発行しているシラバス（「海紅豆の庭」）に5教科で共通して掲載しているのは「ノート活用の方法」である。図表4-4-3は、

シラバスや研究紀要に示された各教科のノート活用法である。年度当初の教科ガイダンスでノートの活用方法について説明するとともに継続して評価資料として利用している。

図表4-4-3 各教科のノート活用法

教科	ノート活用法
国語	授業ノートの他に自分なりに工夫したノートをつくる。予習で語句の意味調べ、新出漢字の学習を行う。復習では授業中の教師の説明や自分で調べたことなどを整理し、まとめさせる。
社会	日常的に家庭で自学自習ノートの作成に取り組みさせる。自学自習ノートでは授業中に出された課題に対する考えを書いたり、授業内容をイラストや図にまとめたりするなどの作業を行わせる。
数学	授業内容から自分なりに工夫したり、必要なことを付け加えたりしてユニークなノートを創るようさせる。「定理ノート」「やり直しノート」等、目的に応じたノート作成に取り組ませる。
理科	授業用ノートでは、実験結果や観察したことを体験から諸感覚に基づく生き生きとした実感を伴う言葉を書き留めるように指導する。思考過程を可視化するためのメモをもとに整理させる。
英語	学習したこと（単語・語句・基本例文・テキスト本文等）はその日のうちにノートに書いて練習させる。重要な表現については自分なりに工夫してノートにメモをとらせるようにする。

ノート活用の質的向上を推し進めることは、「書く力・考える力」を高めることにつながる。板書内容を書き写すだけでなく、考えたこと、調べたこと等を記述していくことは、リーディング・リテラシーを育て、授業と関連付けた家庭学習を充実させる上でも有効である。「継続－習得型家庭学習課題」でもノートは重要なツールになる。確かに、ノートはどの教師も授業で使っている学習材である。けれども授業と結びつけた家庭学習の充実のために、積極的にノートの活用方法を工夫・開発し、確かな学力の向上に結びつけてきたとはいえないのではないだろうか。

先述したように、本校の「基本調査2008」の結果では、「家庭学習力」の「自己学習力」と「学習マネジメント力」の得点が低く、「毎日どんな学習をしたかノートなどに記録をつけるようにしている」という項目に対する否定的な回答が比較的多かった。また「先生は、提出した宿題をきちんとチェックしてくれる」という項目は受検校全体と比較して低い傾向にあった。個に応じたきめ細かい指導・評価を進める点からも、自律的な学習態度や能力を計画的、継続的に育むための「子どものノート活用力を高める指導方法」を実践的に研究する必要がある。

## ②小・中連携を生かしたノート活用力

大阪教育大学附属平野小学校においてもノート指導に重点を置き、継続的に「授業のノート」「教科ノート(自主学習用ノート)」「自由ノート」等を使った指導を行っている。発達段階に応じたノート指導のあり方について事前に教師が共有し、毎日、きめの細かい点検や評価を行っている。たとえばノート活用を家庭学習と関連付けるために以下のような留意事項を定め、全校あげて取り組んでいる。

### ◆高学年(5・6年生)のノート指導(一部)

- 子どもが家庭で学習をふり返っている様子や、新たな問題を作り出している様子を見るために、定期的に教師がノートを点検し、書き方や内容・感想を見て評価・支援をします。
- 自分が家庭でふり返ったことについての手応えを感じるために、必ずその日のうちにノートを子どもに返却します。

(大阪教育大学附属平野小学校発行「平野の知恵袋」、2005より)

小学校で計画的、継続的に取り組んできたノート指導を中学校でもさらに発展させていきたい。方法としては「家庭で復習や予習したことをノートに整理することを前提にして授業を進める」「ノートをポートフォリオとして利用し、規準を定めて記述内容から思考・判断や関心・意欲等を評価する」「ノートを使って教科カウンセリングを行い、学校や家庭における学習方法について助言する」等の活用があげられよう。

このように、義務教育において段階的に子どものノート活用力を高めていくことは、小・中の教

科連携を深めていく方法の一つとして意義がある。またノート活用力は夏休みの自由研究、課題レポート、教科新聞等の作成にも発揮されよう。

## ③家庭と連携してノート活用力を高める

ノートの内容は授業過程であるとともに子ども自身の学習過程ともいる。ノートを通して学習への関心や意欲、学習への取り組み方等の実態について評価し、学習改善の指針を立てることができる。ただし、ノートの書かせ方、活用の仕方等については小学校と中学校では差異が大きい。たとえば小学校では担任によってノート指導のあり方が異なり、中学校では教科によって異なる。もちろん必要な違いは大切にしなければならないが、「ノート活用力を高めていく」という一致した方針のもとで小・中が連携したり、教科間で共通理解を図ったりするような工夫は必要である。

そのためにも、小学校の低学年から中学3年生まで、ノートの書き方、使い方等について段階的に指導するとともに保護者に対しても指導内容を説明し、継続的な協力を求めてはどうだろうか。低学年から、「ノートの使い方をきめ細かく示す」「子どものノートを見てほめる・ノート活用の仕方の向上をとらえてほめる」「子どものノートをもとにした学習懇談会を開く」「よいノートは子どもや保護者にも紹介する」等の工夫を凝らすなど、ノートを軸にした学校と家庭の連携を強めつつ、小学校から中学校にかけて徐々に子どものノート活用力を高めていくことが望ましい。

ノート活用力を高めることを中核にして、家庭における学習習慣の促進や基礎的指導を充実させるとともに、学校における指導の土台づくりや学習の土台づくりに取り組んでいきたい。

## 1 社会科の基本的な考え方

## ①実社会・実生活と関連付けて課題意識を育む

本校の社会科の研究主題は「課題意識をはぐくみ、考える力を向上させるカリキュラムの開発—資料読解の質と活用力を高める指導と評価を通して—」である。

課題意識は課題に対して「問い」を抱き、自己の考えや生き方と照らし合わせ、世の中にかかわろうとする心的エネルギーである。課題意識が高い子どもは主体的に疑問を追究し、調べ、さらに課題意識を高めていく。このことは家庭学習にも波及する。実社会・実生活と関連付けられた課題に対して自力で解決していこうとする態度は学校と家庭の双方の場面で形成される。課題意識を高めるために、獲得すべき知識や概念を明確化、構造化した上で、習得から探究につながる活用の授業を位置づけていきたい。

## ②家庭学習(「短期—活用型家庭学習課題」)を組み込んだ課題学習と単元の設計

単元の設計にあたり、子どもの学習を「習得的場面(概念形成)」と「活用的場面(課題探究)」の2つの枠組みから構成する。習得的場面では、知識や概念、基礎的な技能を子どもが身に付けることを、活用的場面では習得的場面で身に付けた知識や技能を活用し、主体的な学習能力を高めることを目的にする。

「活用的場面」では発展的学習を行う。発展的学習とは学習指導要領の内容を深化・発展させたものであり、子どもが主体的に追究したり表現したりする場면을重視した学習である。このような発展的学習において、「短期—活用型家庭学習課

題」を示し、授業と家庭の双方の時間と場を使って取り組ませる。

以上のように、授業と結びつけた家庭学習の充実のためには、子どもが主体的に取り組む学習課題と単元全体の設計・計画を同時に構想しておかなければならない。

## ③資料読解の質を高める指導と評価

新教育課程の中心的課題は、「生きる力」としての考える力(思考力・判断力・表現力等の育成)である。これらの能力は、リーディング・リテラシーの育成と関連付けられ、言語活動を充実させることにより実現する。

社会科では資料読解と言語活動を結びつけ、相互に高めるという指導と評価のあり方が問われる。すなわち、資料読解の力を培うことは内容理解を深めることであり、問題解決に取り組む能力や態度を形成することでもある。資料を媒介として、具体的内容と抽象的事項を往復させ、豊かな知識と確かな思考力を培うことが授業構成の柱となる。

けれども、資料を的確に読解する能力が子どもに育っていなければ、単に知識の詰め込みになってしまう。資料の特性に応じた読解能力を系統的に高める指導を工夫していかなければならない。そのためにも家庭において「授業中に示された資料を家庭で再度読み直す」「授業中に書いた文章をじっくりと推敲する」「家庭で収集可能な資料(新聞・インターネット・家族への取材等)をノートに整理する」などの活動を促すことにより、資料読解の量を確保しつつ質を高めていきたい。



## 2 単元計画(全14時間) - 「大都市・大阪の今と未来を考える(1年生・地理的分野)」-

この単元計画の目標は、「47都道府県の中から幾つかの都道府県を取り上げ、地理的事象を見いだして追究し、地域的特色をとらえさせるとともに、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる」ことである。単元を「①都市に着目した地域性の解明(7時間)」と「②未来に向けての都市づくりを考える(7時間)」の二つに分ける。前者は「習得的場面(概念形成)」であり、後者は「活用的場面(課題探究)」である。

この単元では、地域的特色を明らかにする方法を公民(市民)的資質に結びつけ、当事者として考え、判断する意欲や能力を高める。地域社会を静態的に把握するだけでなく、動態的にもとらえ、みずから地域社会・コミュニティを形成していこうとする意志を養いたい。

また、都道府県に関する地理的、歴史的な知識を土台にしつつ、地域的特色を解明する視点と方法を学ばせたい。大阪府は生徒が居住する地域であり、地理的、歴史的な知識も豊富である。統計資料等を入手しやすく、新聞からの情報収集や聞き取り、景観観察も容易である。また「小学校での学習内容・学習経験」や「身近な地域の調査(学校周辺の調査)」を生かすことができる。さらに当事者(市民、生活者)として、望ましい地域(都市)のあり方を探究し、提案するためにも適切な単元といえる。

最終的に「これからの都市づくり-私たちのプロジェクト提案-」というテーマで主張文(1000字)の作成に取り組ませる。この主張文は新聞の読者の欄にも投稿する。

## 3 家庭学習を組み込んだ単元計画

家庭学習の方法や意義を伝え、授業において積極的に生かしていくことで授業と結びつけた家庭学習の充実を促すことができる。家庭学習課題の目的や内容、評価規準・判断基準を明らかにし、家庭学習の成果を授業に生かせるように単元構成を図る(図表4-4-4)。

たとえば単元計画の中に、「自ら課題を設定し、追究する」という学習過程を位置づけるとする。事前にガイダンス等で学習の最終到達地点や学習

過程、あるいは家庭でやるべき課題やその方法を示しておくことにより、生徒は計画的に取り組むことができよう。また単元に入る前にあらかじめ家庭で取り組んだ課題を持ち寄ることで家庭学習として「資料の収集・観察」を学習過程に組み込んだ際、家庭ではどのような方法で資料を収集するのかということ誰もが達成できるように具体的に示しておくことが必要である。

図表 4-4-4 家庭学習を組み込んだ単元計画

①「習得的場面（概念形成）」都市に着目した地域性の解明（7時間）

時間	主 題	おもな学習活動	家庭学習課題（短期・活用型）
1	大阪府の自然的特色 —地図から地形を読む—	地図や統計を見て、大阪の地形的環境や気候的環境を大観する。3Dの立体地図(近畿地方)を観察し、近畿地方における大阪府の地形的特色を把握する。	<b>①夏休みの課題《身近な地域の歴史を調べる》</b> 自らテーマを設定し、身近な地域、大阪の歴史を調べ、レポートにまとめさせる。歴史的分野の授業で大阪の地域史を扱うので、このレポートを授業でも活用する。地域の歴史を調べるにあたっては、大阪府にある歴史系博物館を紹介したり、具体的なテーマ例について解説したりするなど、事前にガイダンスを実施し、目的や方法について理解させる。 <b>②ワークシート課題《統計を読む》</b> 授業で以下の内容についてワークシートを用いて作業させる。授業時間中に完了できるように指導するが、さらに丁寧に作業したい、もう少し考えたいという生徒には家庭課題として取り組ませる。 ●大阪府の人口に関する統計を比較しながら読解し、傾向や地域差を読み取り列挙する。 ●道路、鉄道、航空の交通の発展が都市の発達にどのように関わるのかを地図にまとめる。 ●人口の移動と交通との関係を読み取る。 ●大阪府の産業に関する統計をもとに、読み取れることや背景や理由を記述する。さらに背景や理由について関係図に示す。
2	大阪の歴史—地域史をたどる・都市の起源と発展—	古代、中世、近世、近代の大阪の移り変わりを教科書や諸資料をもとに大観する。特に近世や近・現代における大阪の発展のあらましを把握する。	
1	人口統計から見た大阪府	人口密度や人口増加率の統計を見て階級区分図を作成する。また大阪府の人口に関する基本的な統計をもとに都市の規模や配置について理解する。	
1	交通から見た都市間のつながり	地勢図や新旧の地図を見て、大阪における交通の発達の様子と他地域とのつながりを把握する。交通網と都市の立地、都市間の関係を整理する。	
2	産業統計から見た大阪府	大阪府の統計(産業に関するもの)を読み、全国的な視野のもと他地域と比較しながら、産業から見た大阪の地域的特色を読み取る。(統計の分析と総合)	

②「活用的場面（課題探究）」未来に向けての都市づくりを考える（7時間）

時間	主 題	おもな学習活動	家庭学習課題（短期・活用型）
2	都市化する社会—関西大都市圏（都市を見る視点）	大阪府における政令指定都市の立地や中心地の土地利用をもとに都市の形態や機能、都市間の移動、都市圏の広がり、背景等について理解する。 身近な都市景観、再開発地域、都市モデル等を題材にし、都市に対する関心を深め、他地域への興味を持つ。都市問題に関する基本的用語を理解する。	<b>③ミニフィールドワーク—都市を観察する</b> 大阪市阿倍野区への再開発を例に、都市再生や都市づくりについて関心を持たせる。以下の視点から身近な地域(都市)を観察し、記録する。 ●都心と郊外の景観はどうなっているか。 ●都市づくりはどのように進められているか。 ●都市の環境の良い点、悪い点は何か。 観察したことをもとに、地域課題を設定する際の素材にさせる。 <b>④新聞記事から都市問題を考える</b> 新聞を読んで、地域間格差や都市再生、世界における急激な都市化の問題等、都市に関わる課題点について記事を探し、切り抜いてワークシートに貼る。このワークシートは課題を設定する際に利用する。 <b>⑤統計資料を収集し、読み解く</b> 家庭でも統計データや地図を活用して、都市問題とその対策、都市政策について資料を収集する。また収集した資料を読解する。家庭でインターネット、新聞、図書館等で資料を収集し読解する。 <b>⑥1000字主張文の構成と執筆</b> 学校でコピーした資料を持ち帰ったり、身近な社会事象、テレビや新聞のニュース等も参考にしたりしながら、家庭においても引き続き、テーマに関する主張文のアイデアを練る。また原稿用紙を持ち帰り、執筆活動を行う。 その際、新聞の社説を参考にしながら文章の構成を行う。完成した主張文はグループでの検討の後、修正して新聞社に投稿する。
2	都市問題を考える（都市を考える方法）	都市化問題や都市と地方の格差、環境問題、都市防災、交通問題、インナーシティ問題等、都市をめぐる諸問題に多様な資料をもとに気づく。 統計資料等を活用して、都市をめぐる諸課題について学ぶ。市民として都市づくりのあり方、魅力ある都市の姿等についても構想をめぐらす。	
3	これからの都市づくり—私の提案—（都市をつくる」行動へ）	「未来に続く、魅力あふれる都市づくり」のあり方に向けて、個人でテーマを設定し、1000字の主張文を作成する。 主張文を相互に読解し、評価しあう。主張内容そのものと内容の根拠となる資料との関係を読解し、同意・反論する点を検討する。	

## 4 授業の実際

### ①習得的場面(概念形成)：都市に着目した地域性の解明

#### A. 夏休みの課題

夏休みの課題として、「身近な地域の歴史を調べる(歴史的分野)」に取り組ませた。「身近な地域の歴史について、自分でテーマを設定し、調べ、レポート用紙(5~10枚)にまとめる」というものである。レポートの構成としては、①テーマ設定の理由、②調べてわかったこと、③自分の考え・推理、④結論、⑤参考にした資料・取材先・引用した本、である。

このようなレポート課題に取り組ませる際、評価規準を明確にすることはもとより、モデルとなるレポートを見せ、参考にさせることが肝要である。今回は教科書(歴史的分野・帝国書院)を利用させた。たとえば教科書84頁には「地域調査に出かけよう：中世編—兵庫県神戸市を例に—」では、具体的な調査方法(遺跡・博物館)、地図を使ったまとめ方、中世の調べ方等、多くのヒントが記載されている。この他にも時代ごとに歴史的な視点から地域を調べる際の方法について様々な角度から述べられている。

レポートの一部は教師が選択し、「大阪の歴史—地域史をたどる・都市の起源と発展—」の授業でも利用する。今後の家庭学習に役立つように、生徒が訪れた博物館や図書館、参考にした文献については広く紹介することにした。

#### B. ワークシート課題《統計を読む》に取り組ませる

たとえば人口について調べる際に、①人口密度、②人口分布、③人口構成、④人口増減、⑤人口の動きの5つの観点から統計を読解させる。「①人口密度」については市町村の人口密度、「②人口分布」については、都市の位置と人口(地図帳)、人口分布図、「③人口構成」については人口ピラミッド、「④人口増減」については人口増加率、「⑤人口の動き」については昼夜人口比率について調べさせる。作業としては以下の2つである。

作業①：「大阪府の人口に関する統計：総務省統計局・大阪府」の統計データを使い、「統計地図(階級区分図)」をつくり、分析する。作成する統計地図(階級区分図)は、「①人口密度」と「②人

口増加率」である。

作業②：①から⑤の視点の一つを選び、統計を選択して「人口から見た大阪府の特色」について記述させる。

統計グラフや統計地図を読解し、記述させることになるが、方法として以下の手順を示した。

- 第1段階—グラフの外側を読む(グラフの主題と枠組みの確認)
- 第2段階—内部を読む(「全体読み」から「部分読み」へ)
- 第3段階—理由を考える(疑問から予想へ)

家庭学習課題として取り組ませる場合、作業手順(今回は資料の読解と記述方法)についてワークシートにも具体的に示し、授業で説明した内容を想起しやすいように配慮しておくことが大切である。このように、ワークシートに学習ガイド機能を持たせることにより、授業と家庭学習の連続性を保つことができる。



統計の読解と記述

### ②活用的場面(課題探究)：未来に向けての都市づくりを考える

#### A. 資料の収集力・読解力を高める指導

生徒は様々な資料を集めてくるが読解が不十分なため、活用しきれないことがよくある。極端なケースになると集めた資料をそのまま写すだけであったり、貼り合わすだけであったりすることもある。一つの統計資料からでも様々な発見や疑問がある。またそのような資料を授業で使い、資料読解の手順を説明し、習慣化しておくことが望ましい。中学校1年生では、教師があらかじめ収集

した資料を教室で閲覧できるようにし、生徒がその一部をコピーし、さらに家で読解するという方法が比較的スムーズである。希望者にはパソコン教室でインターネット検索にも取り組ませるが、「大阪府」や「総務省」等のホームページ、あるいは検索語を「環境」「福祉」「国際」「安全」というように指定し、統計データを中心に検索するように指示した。

資料の読解にとって大切なことは、資料から読み取ったこと、観察したことを詳細に記述する力、要約する力を高めていくことである。そのためにも、資料から必要な情報を取り出したり、新たな発見を導き出したりするための指導をいっそう重視し、家庭学習でも継続して取り組ませたい。

書くことの第一歩は「量を記述する」ことであり、次に「質を吟味する」ことである。数多く列挙されたことばを分類しながら、発見を課題化させる。この課題に対する予想や仮説を検証するための資料を収集し、さらに問題の構造を明らかにさせていくのである。



教室の統計資料を閲覧する



インターネット検索で資料を探す

## B. 新聞を活用して資料読解の力を高める

主張文を作成させるにあたり、新聞の「社説」や「読者の欄」を参考にさせた。社説に興味を持

たせ、文章を構成するために、授業で、同日の産経（「主張」、朝日、毎日、読売の各新聞社の社説を配布し、それぞれの主張の内容を比較させる。

さらに家庭学習課題として以下の作業に取り組ませた。

- 主張とその根拠にそれぞれ線を引かせる。
- 自分の考えに近い社説を一つ選ぶ。その記事のキーワードを選び、関係図をつくる。

主張文を作成する際に、社説の論理構成や見出しの付け方をモデルにするように促す。



新聞の社説、読者の欄を参考にして

## C. 1000字主張文を作成するーこれからの都市づくり・私たちのプロジェクト提案ー

主張文は大阪の地域的特色を生かした都市づくりを論理的に提案させることを目標とする。主張文の作成に関しては、「関係図の作成」⇒「構成メモの作成」⇒「執筆」⇒「推敲」の順で指導する。収集した資料をもとに探究させ、主張文やそれを支える資料を協同的（4～5名）に読解・評価しながら、提案力のある文章に構成させる。

特に重視したことは「構成メモ」の作成である。構成メモは、「①問題提起（主題に対する問題提起を行う）」「②意見提示（問題提起に対する、自分の意見を簡潔に示す）」「③展開（意見提示に対する根拠を書く）」「④結論（全体を整理し、主張を再度述べる）」の順になっており、主張文を構成する際の基本的な流れとなる。

主張文の作成にあたって、中学校3年生の国語教科書（教育出版「根拠をあげて述べる」）を読ませたり、「論理的文章の書き方指導 中学校編（市毛勝雄編著、明治図書）」を参考にさせたりした。

主張文の評価規準は以下の通りである。

- 提案性：創造性や説得力のある内容である。
- 論理性：事実(資料)の裏づけがあり、筋道がしっかりしている。
- 地域性：大阪の地域的特色を生かした内容である。

図表4-4-5は主張文のテーマ(一部)である。

この1000字主張文の構成と執筆を授業時間と家庭と両方で取り組ませた。このように比較的長い文章を書かせる場合、かなりの個人差が出てく

る。家庭でじっくり取り組みたいというタイプの生徒には宿題として取り組んだ方が能率が上がるケースもある。また、授業時間中におたがいにデータを見せ合いながら協力して取り組みたい場合は、授業時間中に集中して取り組んだ方が効率が良い。

いずれにしても、授業時間内で完成することができない生徒は家庭学習課題として原稿用紙を家に持ち帰り、執筆活動に取り組むことになる。原稿は4~5名のグループで相互に読み合い、伝え合いながら推敲し、再構成するように指導した。

図表4-4-5 主張文のテーマ(一部)

<p><b>環境の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●環境都市はリサイクル社会によって実現される</li> <li>●大和川に清流を -大和川観光地化計画-</li> <li>●大阪の森林伐採と大型開発</li> </ul>
<p><b>福祉の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●女性労働者の負担を減らす、大阪全体の意識改革</li> <li>●町中で見かけるバリアフリー -僕が思うバリアフリーの問題点-</li> <li>●体の不自由な人やお年寄りの人が住みやすい町に</li> </ul>
<p><b>国際の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●外国人労働者を取り巻く実態とは？</li> <li>●音楽から伝わる国際文化</li> <li>●関西国際空港から伝えよう -大阪の文化を-</li> </ul>
<p><b>安全の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●子どもに対する犯罪の防犯対策を強化する！</li> <li>●安全都市大阪！みんなを信用できる未来へ……</li> <li>●今のカーブミラーの設置基準は問題ではないか？</li> </ul>

## 5 授業の成果と今後の課題

学習全体を通して、「用語的知識を暗記する学習」から「獲得した概念を活用し、読解した資料に基づいて説明する学習」に展開できた。生徒は、環境や安全、福祉等、多様な課題意識を持っており、それらを深めることができたと考えられる。

しかし、一つひとつの資料に対する読解の深まりが足りなかった点が今後の課題である。また複数の異なる資料を比較し、検討することについても不十分な点が残った。インターネットで収集し

た資料を批判的に吟味したり、複数の異なる見解を比較したりする機会は乏しかった。

社会科において授業と結びつけた家庭学習の充実を図ろうとする場合、教科書(地図帳)、資料集等の資料を読解するスキルをスパイラルに高めていくことが重要である。ノート活用のスキル向上もあわせ、多様な「読む」「書く」活動を確実に取り組ませるための指導を継続することが求められる。

## 5 今後の課題 -授業と結びつけた家庭学習の充実に向けて-

家庭学習の長所は「自分が決めた課題を」「自分のペースで」「自分で決めた時間だけ」取り組むことができることである。もちろん自分の裁量で取り組む学習には短所もある。それは、学習の仕方が身に付いていないとなかなか成果が上がらないことである。

けれども、家庭学習を授業やその他の学習指導と結びつけていくことでこのことはクリアできるのではないだろうか。たとえば、家庭学習の目標や評価を明確化し、達成状況をきめ細かくチェックするなど、個人に対応したきめの細かいフィードバックを通して、家庭学習の習慣を高めていくような指導を工夫することである。しかも、このようなアプローチは校種や教科を超えた連携によりいっそう強化されよう。その他、授業と結びつけた家庭学習の充実に向けて課題点として以下のような項目をあげることができる。

### ▶ 一人学びと集団での学びをつなぐ

家庭における「一人学び」を授業における「集団での学び」と豊かに関連付けることにより、「一人学び」も「集団での学び」も活性化される。たとえばグループで決めた共同課題に基づき、話し合いながら自己課題を設定させるなど、グループ学習と個人学習をつなぐことで学習意欲が高まり、習慣化するのではないだろうか。そのためにも学級のまとまりや学習に向かう「モラル」を形成していくことが前提条件となる。

### ▶ 家庭でこそできる宿題の提示

たとえば自分の生活圏におけるフィールドワーク、通学路での観察、家の人への聞き取り等、実社会や実生活と関連付けた「家庭でこそできる宿題」に取り組みせ、授業で積極的に活用することで授業も充実する。子どもが収集した素材を教材として利用することは、一人ひとりの子どもに「出番」を与えることにもなり、学習意欲を高めることにもつながる。

### ▶ 自己学習マネジメント力を高める

学期に最低1回程度は、各教科の学習成果、達成度に即して自分の家庭学習の状況(取り組み内容・弱点・強み等)を分析し、改善する機会が必要である。自己学習マネジメント力を身に付けさせるためには、教科ごとの「家庭学習改善シート」等を配布し、ファイルに蓄積し、教科ポートフォリオとして利用させてはどうだろうか。また担任による全般的な懇談だけでなく、一人ひとりの教科ポートフォリオを利用した教科懇談も実施することが要請される。

### ▶ 小・中で家庭学習の取り組みに関する情報交換を行う

一般に小学校では「学年×10分(たとえば5年生では50分)」、中学校では「学年+1時間(たとえば中学校2年生では3時間)」が家庭で必要な学習時間といわれる。けれども実際はかなりの個人差がある。小学校と中学校で、それぞれ家庭の協力を得て家庭学習の実態を調査し、その上で対策を練り、「小・中として」家庭の習慣化に対しどのような協力を求めるのかということを協議する機会が求められる。

### ▶ 取り組み方を適切にチェックし、指導する

社会科でも生徒の宿題を点検していると、「かなり長い時間をかけ、集中して取り組んでいる生徒」や「短時間でさっと済ませたような生徒」等、様々であることがわかる。家庭学習・宿題に対する取り組む姿勢や意欲によって、学力の差はますます大きく開いてしまう。家庭学習・宿題に取り組ませる場合、最低、何をどこまですべきなのかという分量、かけるべき時間等について事前に指示し、再学習(やりなおし)、再チャレンジの機会を与える。その時は達成できていない生徒でも、時間をかけてじっくり達成できるように指導していきたい。